

展望香港

現状

南シナ海を望む中国南部、香港特別行政区は、香港島や九龍半島、新界、その他多数の島から構成される地域。僅か1100km²の面積に700万人（約92%が華人）が居住し、世界有数の人口密度を誇っている。一国二制度の下、大陸本土と比べ自由な商業活動、社会活動が許容されてきたことから、近年まで我が国を含む世界各国から多くの観光客が訪れ、更に国際金融センターの一角として活発な商取引が展開されてきた。しかしその香港では現在（9月13日）、学生を中心とした大規模なデモが全土で展開され（最大時は200万人ともいわれる）、交通や各種行政機能が麻痺状態となっている。

一国二制度の下、順調に発展を遂げてきたように見える香港。それにもかかわらず今何故、全土を巻き込むほどのデモが行われる状況にまで立ち入ってしまったのだろうか。

これを論ずるに当たり、その前

提となる知識として、香港のこれまでの歴史を振り返ってみよう。

香港概史

香港という地域が、現在の姿に至るまでには様々な紆余曲折があったことはつとに知られている。そもそも香港の歴史自体は先史時代にまで遡ることが可能だが、それが世界史の上で大きな存在感を見せ始めたのは19世紀、欧米列強の東アジアの進出の典型事例として著名な「阿片戦争」の勃発からである。

当時の大陸を支配していたのは満州族によって建てられた清王朝。当時清国は広州（現在の広東省広州市）港を対外貿易の窓口として開放し、限定的に対外貿易を容認していた。なかでも英国（東インド会社）は、17世紀に国内に流入した茶葉による喫茶習慣というものが、俄かに流行の兆しを見せ始めたことを受け、清国（広州港）からの茶葉の輸入を拡大、その代金として大量の銀が英国から流出することとなった（当時英国

は輸入茶葉の価値に相当するほどの輸出商品を持ち得なかった）。

一方、この銀の国外への大量流出は程なく英国側の懸念するところとなり、同国は茶葉の代金に阿片をあてることを考案。英国からは自国で生産した綿製品を英領インドへ輸出し、同インドで栽培された阿片を清国に輸出、そして清国より茶葉を輸入するといういわゆる「三角貿易」を行うようになる。これにより英国側は自国からの一方的な銀の流出を抑えることに成功したが、その一方清国側は、この阿片の輸入増による銀の流出と阿片中毒者の増加による風紀・治安の悪化という問題に直面することになった。

このような状況に対し、清国皇帝道光帝は林則徐を欽差大臣に任命。阿片の持ち込み禁止や英国商人が保有する阿片を没収するなど、取り締まりを強化し、更には阿片の持ち込みをしない旨の誓約を固辞する英国商人の追放も図った。これに対し、英国側は東インド艦隊で応戦、続いて英外相パーマストン主導の下、東洋艦隊